

# 松反り しひてあれやは

## 三栗の 中上り来ぬ 麻呂といふ奴

妻(巻九・二七八三)

席などで披露する座興の歌として作られたのではないでしょうか。

なお、『万葉集』本文の漢字表記では、この歌は「松反四臂而有八羽三栗中上不来麻呂等言八子」と記されま

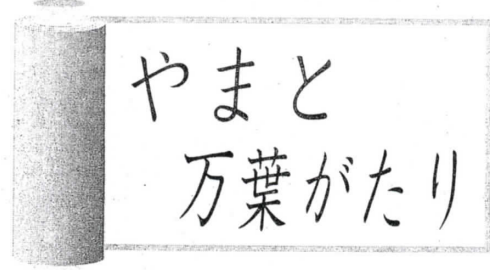
す。「四臂」「有八羽」「三栗」「八子」と、いくつもの数字を織り

込むのが特徴で、こうした表記からも戯歌としての巧みさを読みとることが出来ます。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

この歌は、麻呂という名の男性が妻に対して詠んだ歌「雪こそは春日消ゆらめ心さへ消え失せたれや言も通はぬ(雪ならば春の日にしに溶けて消えるでしょうが、あなたは心まで消え失せてしまったのか、音沙汰もありませんね)」。巻九・一七八二に對する、妻から夫の麻呂への返歌(任期途中での上京を

です。これらの2首はもともと柿本人麻呂歌集に収められており、『万葉集』は同歌集からこの一對の贈答歌を引用しています。歌の内容は、冬が過ぎ春になっても便りを寄越さない妻への苦言を呈した夫に對し、身体に何の不都合も無いにも関わらず中上り



して来ない夫の不義理を妻がなじったものです。このやりとりから、夫の麻呂は地方官として赴任しており、妻は都に残っていたことがわかります。「松反り」「しひ」にかかる、「三栗の」「中」にかかる」と枕詞を二つも用い、常緑の「松」で心変わりせず家で待つ妻の心情、「反り」で帰ってこ

ない夫の態度を表現するなど、高度に技巧が凝らされた歌と評価できます。夫の麻呂については、柿本人麻呂歌集から転載された他の歌(巻九・一七二五)の作者としても見えることなどから、実在の柿本人麻呂であろうか、いやそうではあるまいに、中上りして来ない麻呂という奴めは。